

特集

## ボランティア活動とキャリア形成について

金原 正昭

純真学園大学 就職部長

Looking at volunteer activities and early career formation support

Masaaki KANAHARA

Department of Medical Laboratory Science, Faculty of Health Sciences  
Junshin Gakuen University

### 【要旨】

社会的にボランティア活動の重要性が認識されている現在、その意義についてキャリア形成の観点から学生が自ら学ぶ、学園訓である“気品、知性、奉仕”の精神に基づき、ボランティア活動あるいは臨地実習前の早期体験にかかわることにより自身のキャリアを高めることを目標にする。特に、実際にボランティア活動に参加して地域貢献を果たすための知識、対話能力を磨きキャリアを養う。これを担保するために自ら関係するボランティア活動・早期体験について事前に調べる。また、体験を通して感じたボランティア活動・早期体験とそれまでに持っていたボランティア活動・早期体験に対する意識との差異を確認し、まとめることが重要である。

キーワード： ボランティア活動, キャリア形成, 社会貢献

**Abstract:** In recognition of the importance of volunteer activities, we hope students learn this significance from an 'early career formation' point of view. Based on the spirit of the school motto, "elegance, intelligence and service" the goal is to get students to enhance the way they see their own careers starting off.

One way to do this, is for our students to be actively involved in volunteering and clinical exposure early on. By participating in volunteer activities on a regional level, students get more first-hand knowledge and the ability to communicate better. We feel that students have to try and participate in more volunteer activities and clinical exposure early in order to ensure this.

It is therefore important in summary, to realize the difference between knowledge gained through experience and knowledge gained through study for volunteer activities and early experiences in general.

**Keyword:** volunteer activities, carrier formation, regional contribution



金原 正昭

### はじめに

#### 1. ボランティアとは

「VOLUNTEER」は、「篤志奉仕家」と解されている。これは、ラテン語の「VOLO (ヴォロ)」に起源があり、英語の「will」つまり「意志の力で〈…〉する」という意味である。従って、ボランティア活動は、自発的な活動を示すものであり、義務で強制されるというものではない。しかしながら、従前「VOLUNTEER」という言葉は「献身」と解され、自己抑圧的かつ利他的なニュアンスを持っていたため、活動の範囲が制限されたり、自発的な行動に規制を加えたりすることがあり、特定の人だけが行う活動のようにも理解されてきた<sup>1)</sup>。

しかし近年、いろいろな分野での活発なボランティアの動きが発生し、その意義は、公共的な問題解決の可能性を持った活動であると解釈されるようになってきた。このような理解が一般化する過程で、

“ボランティア”という言葉が持つ本来の意味やその意義の理解が広まりつつある。

## 2. ボランティア活動の多様性

ボランティア活動は、本来個人の自由な意志により、自己を止揚し行動するという行為、つまり「功德性」により支えられているものである。そして、自発的であるが故に、個人の取り組みに違いが起こり、結果として多種多様な活動ができ、既成概念にとらわれることなく、自由で独自の取り組みが実施できる。この事実がボランティア活動の最重要要件である所以である。

しかし、ボランティア活動が個人の自由意志により行われるものであっても、自己の利益を目的とするものであってはならない。その意味で常に「功德性」が求められる。

したがって、ボランティア活動とは、「自発性」や「公共性」が求められる活動ということは言及するまでもなく「多様性」が求められる活動であると理解するべきである。

## 3. ボランティアの副次的要件

また副次的要件として「無償性」があげられる。個人がボランティア活動を実行する場合、無償が基本であり、そこに何らかの対価を求めるべきものではない。さらに、日常的な活動の場面において持続的な活動が要求される場合も多く存在する。持続することが何らかの効果につながることを期待できる場合には「持続性」が求められる<sup>2)</sup>。代表的なものとして、病院内のボランティア活動例えば、患者さんの案内ボランティアがそれである。しかし、イベント的な活動例えば学術会議のボランティアなど、一時的な活動であるが重要なものもあり、継続することが重要であるとは一概にいけない場合もある。したがって活動の内容や効果などを、ボランティア活動を「実施する側」とそれを「受諾する側」とが、アンケートで相互に検証・確認しながら進めていくことが重要である。

## 1. 本学が取り組むボランティア活動とキャリア形成とは

### 1.1 実施目標

地域、各種施設において、ボランティア活動の重要性が認識されている現在、その意義について学ぶ。本学の学園訓である“気品、知性、奉仕”の精神に基づき、ボランティア活動あるいは学外実習前の早期体験学習（Early Exposure）にかかわることにより、自身のキャリアを高めることを目標にする。特に、実際にボランティア活動に参加して地域貢献を果たすための知識、対話能力を磨きキャリアを養う。そのために自ら関係するボランティア活動・早期体験学習について予習する。また、体験を通して感じたボランティア活動・早期体験学習とそれまでに持っていたボランティア活動・早期体験学習に対する意識との差異を確認し、まとめることを実施目標とする。

### 1.2 到達目標

実施目標とは別に最低到達すべき目標、すなわち到達目標を設定している。具体的には、

1. 学生時代に様々な専門学科以外のボランティアを体験することで“社会貢献とは何か”を説明できるようになること。
2. ボランティア活動を通じて自身のキャリア形成について説明できるようになること。
3. 学園訓の具現化につき説明できるようになること。

以上を自ら選択したボランティア活動について実体験をもとに説明できるようになりレポートにしてまとめる。

### 1.3 実施予定内容

各学科の学生は、以下にあげるボランティアを自発的に選択し、通年で実施する。

## 1) 地域におけるボランティアの体験

(西鉄大橋駅周辺の清掃)

真摯に清掃活動に取り組むこと、この際正しい清掃の仕方を知らない学生は正しい清掃手順を理解すること、そして清掃を実施しないとそこがどうなるのかについて考えること、いつもは誰がその掃除をしているかを考えることを、念頭に置き単に清掃するだけに留まらず問題意識を持つことが清掃ボランティアの意義だと考える。また地域貢献にも資する行為である。

(参考として本学サークルであるクリーンアップサークルの活動を写真1に示す。)



写真1. 清掃をする学生ボランティア

## 2) 学会・研修会運営における体験

(看護協会、診療放射線技師会、臨床検査技師会、臨床工学技士会)

学術研究発表会(学会)とは、学問や研究の従事者らが、自己の研究成果を公開発表し、その科学的妥当性をオープンな場で検討論議する場である。また同時に、査読、研究発表会、講演会、学会誌、学術論文誌などの研究成果の発表の場を提供する業務や、研究者同士の交流などの役目も果たす機関である。従って、学会の計画、運営を円滑に行うには、学会に携わるボランティアの努力と実行上の知識・ルールが必要となる。無論、学会の計画、運営を行うのは専門の業者が行うが、学会会員、ボランティア学生の果たす役割は決して小さくなくむしろ大きくなりつつある。

具体的には以下のボランティア活動が想定される。受付業務、クローク業務、スライド運營業務等である。それと同時に、学会参加も合わせて体験できる。そもそも学会とは最先端の研究成果に触れることのできる貴重な機会であり、新しい・珍しい研究にも出会える場である。

近年、病院・企業も、学生が大学でどのような勉強・研究をしてきたのか、卒業研究のテーマは何か、ということに関心を持つようになってきた。事実就職活動の際に、卒業研究の内容について尋ねてくる病院・企業も増えている。ぜひ多様な視野に立って、自分の研究にも関心を深めて欲しいと考える。

また日本の学術、技術力向上などによる国際的立場の進展に伴い、日本国内において国際会議を開催することが日常的になってきている。福岡で国際学会が催されることも決して少なくない。通常英語が公用語として用いられ、語学研修の一面も合わせ持つのが国際学会である。これらの体験をもとに学会活動に目を向けてくれる学生も出てくると考える。

通常、学会では懇親会・パーティも開かれる。学会の席上ではなかなか聞けない研究者の生の経験談等を聞く絶好のチャンスでもある。とくに国際学会の場合は、世界中から集まった研究者の労をねぎらうために、趣向を凝らした開催国・地域ならではの企画・出し物が用意されることが多い。地方の伝統的行事等が披露されることも多く、広く知見を広めることも同時に可能である。

さらには副次的なものであるが、関連する分野の病院・企業の方も多く参加されるので、良い印象が残れば、就職の足がかりになる可能性もある。このような意義も二次的に発生する。学会は発表し、聴講するだけでなく、人的なつながりを作る場でもある。特に自主的に動いている学生は高く評価すると言う声を採用担当者からよく聞く。

(参考として福岡で開催された第7回日台韓細胞診国際学会を写真2、第48回九州支部医学検査学会を写真3に示す。)



写真2. 学会場前での学生と筆者



写真3. 飲みものの配布をする学生ボランティア

### 純真学園大学 各学科の早期体験学習実施状況一覧（平成26年度）

#### 1. 看護学科

実施日	実習先	対象学年	参加人数（人）	備考
平成26年9月4日～5日	九州中央病院	1年生	75	「看護学概論」（1年次前期・必修科目）の一環として実施
平成26年9月4日	宗像医師会病院		8	
計			83	

#### 2. 放射線技術科

実施日	実習先	対象学年	参加人数（人）	備考
平成27年3月4日	九州大学病院	1年生	28	
平成27年3月4日	日本メジフィジックス(株) 久留米大学病院		8	
平成27年3月4日～5日	日本メジフィジックス(株) 九州医療センター		7	3月4日見学 3月5日見学
			平成27年3月5日	九州医療センター
計			61	

実施日	実習先	対象学年	参加人数（人）	備考
平成26年9月12日	九州医療センター	2年生	30	
平成26年9月12日・22日	九州医療センター 日本メジフィジックス(株)		5	9月12日見学 9月22日見学
			平成26年9月22日	日本メジフィジックス(株) 久留米大学病院
平成26年9月22日	九州大学病院		33	
平成26年9月24日	久留米大学病院		5	
計			79	

#### 3. 検査科学科

実施日	実習先	対象学年	参加人数（人）	備考
平成26年9月17日	九州医療センター	2年生	20	
平成26年9月18日	九州中央病院		8	
平成26年9月18日	九州がんセンター		20	
平成26年9月19日	九州医療センター		20	
平成26年9月19日	九州中央病院		7	
計			75	

### 3) 病院での早期体験学習

現状すでに医療工学科以外の学科では、主に進路対策委員が学外実習対策委員と連携しながら、早期体験学習として1年次または2年次に病院見学を実施している(表1)。この早期体験学習を通して、進路に対して明確な目標設定の動機付けを行うとともに、就職に関して大きなミスマッチが生じないように留意している。今後は、医療工学科も含め早期体験学習を学ぶにあたり、医療現場の一部に触れ、その目指す方向を垣間見ること、医療への学習意欲を高めることを目的として、大学生活にも慣れた2年次の精神的に余裕のできる時期でかつモチベーションの高い時期に、以下の実習を行うことを予定している。医療を支える様々な部門や多職種の役割を理解するために、学科毎に、病院内の関係部門を見学する。例えば看護学科であれば病棟で、配膳、ベッドメイキングなど看護師、看護助手の業務を手伝い、患者とふれあいながら病棟業務の流れを体験する等である。また早期体験学習の効果を高める目的で、アンケート調査を実施する予定である。例として、“学生として勉学に対するモチベーションは高くなったか?” “今回の早期体験学習により、将来の目的や学習目標が明確になったか?”等を想定している<sup>3)</sup>。

(参考として本学26年度検査科学科病院見学を写真4に示す。)



写真4. 組織切り出しを見学する学生

### 4) 純真保育園での体験

子供の世話は、大人と比較して意思の疎通が図れないことも多く、その経験が将来医療の現場で働くときに役に立つと考えられ、医療系学部生としては貴重な体験となると考える。従って、体験の意義を高める意味でも“積極的に動くこと”“分からないことは尋ねる習慣をつけること”“注意すべきは、聞かなくて勝手に判断してしまうこと”などに十分留意することが重要であると考えられる。保育園での体験ボランティアは、良い意味での“分からなくて当たり前”“慣れてなくて当たり前”と言う積極的な気持ちで臨むこと。また、掃除などの雑用は努めて積極的に行うことが重要と考える。

### 5) 在宅ケア施設における体験

在宅ホスピスを行っているクリニックにおける健康教室等ボランティアと地域生活支援事業の「日中一時支援」におけるボランティアを予定している。健康教室には、テーマによって地域住民や診療所を受診する患者およびその家族が参加予定であり、準備から後片付けまで運営に関するボランティア、日中一時支援においては、障害「のある」子供たちを対象としたケア(遊びも含む)を一緒に行うボランティア活動を考えている。

### 6) 高齢者施設における体験

高齢社会の現状を知り、介護等の体験を高齢者施設で行って行くことを目的とする。具体的には、車椅子の介助、お話を傾聴する、食事の準備および摂食時の介助、入浴時の衣服の着脱の介助等、また、施設での夏祭りや運動会等のイベントにおける準備・進行などのスタッフとしてのなどでボランティアとして活動を想定している。

## 7) 子宮頸がん啓発事業における体験

本学では、すでに大学学園祭を活用した検診車による子宮頸がん検診の試みを、2012年より実施している。子宮頸がん検診の問題点として受診率の低さが知られており<sup>4)</sup>、2011年度より「子宮の日」の活動を純真学園大学のキャンパス内で実施し、子宮頸がんとはどのような病気で、子宮頸がん検診を受けることの意義を記載したパンフレットを配布している。数多くの学生が子宮頸がん検診を受け、その中で行ったアンケートの結果、受診行動の動機付け要因としてコストフリー、病院に行く必要がない等が明確になったとする<sup>5)</sup>。若年者の子宮頸がんは早期に発見されれば予後もよく、その意味で若年者検診率の低さは問題も多い。今回のアンケートで興味を引く事例として“一緒に行く友達がいた”がある。これは子宮頸がん受診の“ハードル”の閾値を下げる効果があると考えられる。若い学生が子宮頸がん啓発事業ボランティアに参加することで、若年者の受診率の向上が期待される。

## 考察

本学学生がボランティア活動・早期体験学習に赴く前に、大学において、地域・医療施設でのそれぞれの職種の役割等の概説、および目的意識の明確化を目的とした事前学習を実施する。ボランティア活動終了時にアンケートを実施し、問題点等を抽出し、改善点があれば修正したいと考える。

以下ボランティア活動とキャリア形成について考察する。

一点目として、ボランティアのよさとして心の温かさや人とふれあう気持ち、好縁のきっかけとなるボランティア活動と少子高齢化、経済の成熟化、グローバル化を背景に職縁社会の基礎となっていた長期雇用や年功賃金を中心とする雇用慣行が変わりつつあることを考えると、ボランティアのつながりは、ボランティア活動に対し共感を持つ人同士のつながりであり、新しい関係を生み出すものである。このように、ボランティア活動を通じての人のつながりは、好縁の輪を広げる一つの方法であると位置付けることができると国は考えている<sup>6)</sup>。このように国もボランティアの意義を認め、特に好縁を得る機会だと認識していることはボランティア活動のひとつの成果と考えられる。

次に、早期体験学習が今後実施される学外実習に向けた1つのステップであることを考えると、早期体験学習を2年次のみでなく、繰り返し行うことにより、学生に対する教育効果が得られる可能性が考えられる。ただし注意すべき点として、“学生の服装、態度の印象について一部の施設において不快であったと回答したケースがあった。具体的には、「元気がよく、第一印象はよかったが、服薬指導をさせたとき、患者さんの前にも拘わらず、白衣のポケットに手を入れたまま立たれたのが困った。」という意見があり、このような事例については、次年度での事前学習などで周知をするなどの対応が必要であると考えられる。”と注意を喚起する先行研究<sup>3)</sup> またアンケートや学生レポートを使って学習評価をフィードバックすることは、学習目標到達において重要であることが再認識できるとし、フィードバックを適切な時期に行うことが、早期体験学習の目的・目標にすべての学生を導くことに繋がって行くものと考えられる<sup>6), 7)</sup> とする研究もあり、アンケート調査の重要性が理解できる。

三点目として、医療を支えるためには、「人を知る」必要があり、そのためには、いろいろな年齢層の人々と、それらの人々の生活の場は、キャリア形成の対象になると考えられる。本学のボランティア活動では、保育園児から高齢者までと対象者の年齢の幅が広く、非常に難しい時期である、若年期の子供に接する機会はなかなかないと考えられる。今後、ボランティア活動を更に拡充していくためには、純真保育園であれば継続して、成長に関わっていく、という継続的なボランティア活動が考えられる。様々な問題が予想されるが、実施されれば、画期的な演習となると思われる。

最後に、諸外国でもボランティア活動とキャリア形成に関する研究が数多く見受けられる<sup>8), 9)</sup>。ボランティア活動の学生プログラムは健康科学研究に興味を持つ学生に関心が高い結果、参加者に有益なキャリア形成の可能性を指摘している<sup>8)</sup>。また、患者、家族、スタッフのための癒しと健全な環境を作成することが継続的な課題としつつ、統合医療プログラムの一環として、ボランティアプログラムが、

痛みや不安を軽減し、患者のための有益な手段となるとし、看護師を支援することができるとする研究もある<sup>9)</sup>。

以上ボランティア活動はキャリア形成に役立つことが予想され、今後の演習の結果に注目したいと考える。

## 謝辞

本稿を終えるにあたり、資料の提供を頂いた本学検査科学科 山本誠一教授、看護学科 一原由美子教授、山崎律子教授、IR室 細矢貴弘係長に深謝します。

## 参考文献

- 1) 岡部光明：利他主義（altruism）の動機と成立構造について  
SFC ディスカッションペーパー SFC-DP 2014-002 2014年
- 2) 宋 美英：ボランティア活動の継続・発展とボランティア組織の構造 -福祉ボランティア活動を事例に- 北海道大学大学院教育学研究院 紀要 第109号 p51-80 2009年
- 3) 廣田和仁，立石正登：長崎国際大学薬学部における早期体験学習の評価 『長崎国際大学論叢』 第8巻 p241～247 2008年
- 4) 横山良仁，二神真行・水沼英樹：子宮頸癌の最近の話題 若年者の子宮頸がん検診の重要性，予防的ワクチンの行方，HPV 検査の位置づけ 青森臨産婦誌 第25巻 p 1-14 2010年
- 5) 中野智裕，濱田維子，井上福江，伊藤裕司：大学学園祭を活用した検診車による子宮頸がん検診の試み 純真学園大学雑誌 第4号 p135-139 2014年
- 6) 平成12年度 国民生活白書 ボランティアが深める好縁 経済企画庁
- 7) 柳久子，戸村成男，森淑江，江守陽子，紙屋克子：医療・福祉現場における早期体験実習（early exposure）筑波大学医学専門学群における経験，医学教育 33巻 P43-49 2002年
- 8) Steadman PE, Crudden J, Naranian T, Oliveria JP, Boutis K. The professional benefits for volunteer research assistants in a pediatric emergency department. J Emerg Med. 48:287-93.2015
- 9) Hahn J, Reilly PM, Buchanan TM: Development of a hospital reiki training program: training volunteers to provide reiki to patients, families, and staff in the acute care setting. Dimens Crit Care Nurs. 33:15-21.2014